サークル・リボルヴ

音無　無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サークル・リボルヴ

【Ｎコード】

Ｎ４６５４Ｓ

【作者名】

音無　無音

【あらすじ】

ある、中学校に転校してきた少女。　彼女は魔法使いと等しい力を持っていて――！？

登場人物紹介　＜７／１６更新＞（前書き）

ネタバレあり！
裏峪さんちのお家も載せました

登場人物紹介　<7／16更新>

■月野（つきの）　廻（まわり）
私立緑座木中学校に転校してきた少女。
魔法のような不思議な能力を持つ。
一人称は「私」で、黒髪の長髪。

■古倉（こくら）　彩音（あやね）
元気な子。
廻の転向してきて初めての友人。

■村部（そべ）先生
セクハラで捕まった人

■荒田（あらだ）　雄三（ゆうぞう）
相撲部の主将。
出オチ。

■前島（まえじま）　久志（ひさし）
廻と関係がある刑事。

■？？？？
被害妄想（パーセキューションコンプレックス）という厄介な能力を持つ男。
学校を襲ってきた。

■蜜谷（みつや）　裏峪（りたに）
保険医。
なんか知らないけど、協力してくる（ｂｙ廻）

■明日本（あすもと）　理吹（りぶき）
サラサラの金髪。喋り方が特徴的。
紫の肩までのカットソー、白いワイシャツを羽織っている。
デニムパンツに黒パンプスという戦闘不向き。

■無戸（なしど）　終（しゅう）
真っ黒。
廻曰く色々不明な人。

【橙学園】
オレンジ色の派手なセーラー服が特徴。
女子校。
★可知（かち）　響子（きょうこ）
前髪おかっぱの黄緑色のみつあみ。
一人称はあたし。　不思議な笑い方をする。
“工具戦法（こうぐせんぽう）”。

★薗園（そのぞの）　レイキ
口が悪い。　生徒会庶務。　銃を使う。

口癖「んっは」

★美々津（みみつ）　晴（はれ）
生徒会書記。

★夏（なつ）　七里（ななり）
小さくて可愛いが毒舌。　自分のことを「七」と呼ぶ。

【裏峪宅　部屋】
・応接室
無駄に広い。

・特設道場
作ったが使われず五年ほど放置されていた。（掃除だけやってある）
体育館並みに広い。

回転1：「テンコーセー」

「テンコーセーだって！」
「女子って聞いたぞ」
「マジかよ。見に行こうぜ」

「ごめん、ちょっとどいて」

「・・・・・・・、え、あ、はい、すいません」
廊下をふさいでいた男子に彼女は言った。
「って、あれ誰？」
「見たことない顔だな」
「転校生らしいぜ」
「「「マジで！？」」」

「ねえ、ね、月野さん！」
「・・・・・・・・・・・・何？」
「校舎案内するよ！」
彼女は月野（つきのまわり）廻。
市立緑座（みどりざき）木中学校に転校してきた。
「そう、ありがと」
「月野さんクールだよね！あ、メガネって伊達？」
「別に・・・・・・、あと、廻でいいよ」
「ほんと？あっ！あたしは古倉（こくら）彩音（あやね）！宜しくね」
彩音はにっこりと微笑んだ。

「お、彩音。お前偉いな。転校生を案内か」
「・・・・・・・・・ッ！村部（そべ）、先生・・・・」
「・・・・・・・・・・？」
「そうだ、なあ、彩音。ちょっと話があるんだが。
という訳で、転校生くん・・・えっと」
「月野ですが、何か？“私の友達”に御用でも？」
「え・・・・・・・・・」
村部は、「チィ」と舌打ちして去った。
「廻・・・・」
「何？」
「何でも無い」
くるり、と方向を変えて進み始めた。

「なんだ、あの転校生・・・・、俺のことがわかってるのか？
クソ！知ってる訳がない！！」
暗い職員室の中、村部がつぶやく。
「あの生徒は俺が先に目星を付けた・・・・、
早く、早く奪わないと・・・・・・・！」

「廻・・・・・・・、相談があるんだけど」
「相談？」
クラスの端っこで、彩音が廻の長い髪を結びながら言う。
「先生のことで――」

回転２：「村部先生」（前書き）

登場人物

・月野（つきの）　廻（まわり）

・古倉（こくら）　彩音（あやね）

回転２：「村部先生」

「村部先生」
廻が声をかけた。
とっくに下校時刻は超えている。
「な、なんだ？」
「お話、いいですか？」

「なんだい、話って」
「それは、友達に関してですよ」
「・・・・・・・・・・・・何？」
「私は魔法使いといっても過言じゃない」
「フッ、ハハハハ！いきなり何を言うんだ！」

「あんたの心が読めるっていったんだ」

「あん？」
廻は椅子に腰掛けた。
「今まで、してきたこと、とか」
「お前、何言ってんだ？」
「例えば――放課後、呼び出して――」
「おい・・・・・・・・」
「セクハラとか」

「おい！」

「なんですか？真実ですよ」

椅子から降りて、先生の周りを歩き始めた。
そして
「私は嘘をつくし、見抜ける。
それだけじゃない。それだけ、じゃ。」
「何が言いたい！」
「友達苦しめんな」
血がでるほど固く握り締めた手を、
村部に向けた。

「ったぁ！！お、お前！生徒が教師に手を上げていいのか！？」
「それは、こっちのセリフですよ」
と言って指パッチン（フィンガースナップ）した。
警官が数人。
教務室に入ってきた。
「あんたは二度と教師になれないよ。」
「・・・・・・・・・・っ！？」
「残念」
「俺がぁ、何した！」
「しつけえなあ」
もう一発殴ろうとする廻を彩音が止めた。
「彩・・・」
「いいの」
「おお！やっぱり、お前許してくれたか！」
――墓穴掘ってるよ・・・・・
と廻は思う。
彩音は左手を握った。
「そぉれ！」
ゴッ

「お、おい、彩・・・・・・」
「へ？」
「なんで殴った！？」
「だ、だって廻が殴ってたし・・・・・・」
「あれは、私だから！」
影で見守っていた校長がこう言った。

「古倉さん、停学です」

「ねえ、なんで、廻は許されてたの？」
「私は世界中で認められた人間だからさ」
「なにそれー？」

回転３：「病院行きな」（前書き）

登場人物

・月野（つきの）　廻（まわり）

・古倉（こくら）　彩音（あやね）

回転３：「病院行きな」

「あれが、例の転校生か？ただの女じゃねえか」
いかにもって感じの体格をした男子生徒が
教室に入ってきた。
彼は荒田（あらだ）　雄三（ゆうぞう）。
相撲部の主将だ。
「そ、そうなんすよ、荒田さーん」
「あんなひょろっちい奴に負けたのか、お前」
「す、すいませーん・・・・」
と、謝っているのに、荒田はその男子生徒を殴る。
「雑魚が。」
とツバも吐き捨てて。

「よお、転校生ちゃん。俺と一戦交えねえか？」
「はぁ？」
いきなりの宣戦に、本当に嫌そうな声を出してしまった廻。
「なんで私が？」
「俺の部下をボコッてくれたらしいからよぉ」
「あれは、依頼があったから」
「はぁ？どっちにしろぶちのめすからな」
と言って構える。
相撲で戦う気はないらしく、普通に拳を構えていた。

「ふうん。ここじゃ邪魔だし、廊下出てよ」
「お、やってくれるのか」
普通に従い、廊下へ出た。
そして、廻の方に身体を向き直した瞬間――

飛んだ。

廊下の端から端まできれいに。
廻はデコピンを放ったらしかった。

「病院いきな。多分頭の骨にヒビ入ってるよ」

だそうだ。

それからというものの。
廻はあの、いじめっ子であり、
この学年最強だった男子を倒したわけなので、一躍有名人となった。

もちろん、さっきの男子は病院送りにされ、結果「ヒビあり」だったそうだ。

回転３：「病院行きな」（後書き）

元は戦闘小説にしようと思ってたので、
１話、２話はただの序章。

回転４：「そこまでだ」（前書き）

登場人物

・月野（つきの）　廻（まわり）

特別な力を持つ転校生。

・古倉（こくら）　彩音（あやね）

廻の友人。

回転４：「そこまでだ」

ジリリリリリリ。
サイレンが鳴る。
『全校生徒、教師に連絡します！
不法侵入者数名！今すぐ生徒は――』
「侵入者？」
退避中に、廻がそうつぶやく。
「馬鹿だよね、人間って。」
そして、こう続けた。
「？　なんで？」
「侵入者は校内にいるんでしょ？だったら、
“どこに逃げろ”なんて、言うもんじゃないよ」
「あ・・・・」
「ここにいますから、襲ってきてくださいー
って言ってるもんじゃないか」
と言って、避難場所と逆方向を向く。
「先行ってて」
「ちょ、どこ行くの！？」
「鬼退治」

「体育館だと。どうする？リーダー」
『そうだな・・・・・・、どうせ、教師の防衛網がある・・・・』
無線で通じ合ってる。
結構複数いるらしい。
「その前にアンタラは死ぬ」

「なっ！？う、うわあああああ」
『お、おい！？どうした！？』
「ばいばーい」
廻は、無線をグシャリと踏み潰した。
「さて」
クル、と後ろを向くと。
今まで倒してきた敵、、侵入者の残骸があった。
死んでないけど。
「あと何人だよ・・・・・・」
残骸（死んでないけど）はざっと十人。
学校侵入にこんな複数あるか？と、廻は思う。

「そこまでだ」

「！」
振り向くとリーダーらしき人間（＋α）
「よくやってくれるな、認めるよ」
「・・・・・・・目的は」
「目的？ああ、これはどうかなぁ
『ここの学校の好調に恨みがある』とか
『嫌いな人がいる』とか」
「ないのね」
「あっはは！馬鹿げてるな！
いちいち人殺しに目的がないように、侵入にもないのさ」
「デタラメね」
フッと微笑む。

「本当にないの？私は心を読める」
「ふ・・・ふはははははは！！お前、ふざけ――」

ゴッ

「リッ、リーダー！？」

このリーダーもいつかの、主将みたく、飛んだ。

回転５：「もう少し」（前書き）

登場人物

・月野（つきの）　廻（まわり）

特別な力を持つ転校生。

・古倉（こくら）　彩音（あやね）

廻の友人。

回転５：「もう少し」

「誰かの暗殺、違うかな？」
ゴツン。
額に重々しい銃器が当たる感触。
「ご名答・・・・」
「誰かまではもういいけど」
「教えてやるよ」
「いいって言ってるじゃない」
「それはな」

「「古倉　彩音」」

リーダーと廻の声が重なる。
「な・・・・・・」
「だからいいっていったじゃない」
「ど、どうしてわ――」
「動かないで」
銃器は跡が付きそうなほど押し付けられている。
「いちいち感情的にならなくていいよ。
　そんな小さな演技じゃ私の心は動かない」

ガォォオン！！

銃声。

「し、死んでない？！」
「今のはフェイント。」
リーダーの後ろには弾丸がコロコロと一発転がっていた。
「何があったんだ？」
「撃ったよ。ちゃんとね。
だけど、もう少し話を聞きたいから生かしてあげた」
「なんだよ、それ！」
男はさりげなくズボンのポケットに手をやる。
「動くなって言わなかった？」
今度は。
しっかり撃った。　もちろん、その手に命中。
「ぐっ！がああ！！！」
「話が通じないみたいだね」
外にはパトカーの音。
即座に警察が駆けつけた。
「やあ、刑事」
「廻君・・・・・・、また君か」
「この男に話があるから、ちょっと“ひきこもるね”」

回転６：「引っかかったな」（前書き）

登場人物

・月野（つきの）　廻（まわり）

特別な力を持つ転校生。

・古倉（こくら）　彩音（あやね）

廻の友人。

回転６：「引っかかったな」

「この男に話があるから、ちょっと“ひきこもるね”」
そう言うと、次元に穴があいた。
渦状の不思議な入口ができたのだ。
廻はそこに、リーダーを押し入れる。
そして、次元をとじる。
「君は入らないのかい？」
「君だなんて、よそよそしい呼び方やめてよね。」
刑事、否、前島（まえじま）　久志（ひさし）に言う。
「あぁ、すまん」と前島は謝った。
それで満足したのだろうか。
廻は笑顔でもう一つ次元への入口をつくる。
というか、床から現れた。
それは、足、スカートとどんどん周りを異次元へと吸い込んでいた。
残りが肩から上になったところで、廻はいった。
「ちゃんと、調査してくださいね」

「くそ、暗いし、さみい！出せ！クソ！」
「意外だな。殺人未遂犯にも人の感情があったの」
「て、てめえはさっきのガキ！おい、出せ！」
暗闇で廻の姿が確認できていない。
だが、廻からは、はっきりと確認できている。
なにせ、この能力の元は廻なのだから。
「嫌だ、と言ったらぁ？」
「こ、この銃で撃つ！」
「その右手で撃てるの？」

右手はさっき、廻が一発撃ったのだ。
そして、さらにはこの暗闇である。
当てずっぽうに撃っても、
廻からは確認できているのだから、当たるはずがない。
「この空間では貴方は徹底的に不利なの。諦めなさい」
「・・・・・・・クッ」
下を向き、本当に悔しがっている“ように見える”。
（ように・・・・・見える？）

「引っかかったな」

「！！」
「俺の能力、『被害妄想（パーセキューションコンプレックス）』、発動」
（しまった、こっちが仕掛けられたのか！）
咄嗟に構えるが、もう遅い。
「俺の能力はちぃとばかし、厄介だぜ」
“前にいると思ったのに彼は、後ろに立っていた”。
「・・・・・・・・ッ！」
重い蹴りを一発食らう。
ガードはしたものの、両腕には激痛。
下手すると、折れたかもしれない、と廻は思った。
でもそんなこと、構っては居られない。
二発目も、来た。
今度はガードが間に合わず、“後ろから来た攻撃は”まともに食らった。
「かっふ・・・・・！」
前に倒れこんだ廻を見下ろすように地に着く。
「おいおい、苦しいか？」
ゴリゴリ、と靴で頭を踏む。
「・・・・・・・ッ！・・・・・ッハァ・・・・・・ハァ」

「っはは！喋れねえか。さっきはよくも俺を」
今度は腹を蹴る。
「・・・・・ッガ！」
「もうすぐ死にそうなお前にひとつ教えるよ」
「・・・・・・・・・・・・・？」

「俺の部下はダミーだ。
本当の部下は今頃あの嬢ちゃんを殺しに行ってるだろうね」

回転６：「引っかかったな」（後書き）

一度プレビューしたら、ルビがすごいことになっとるね

回転7：「――本当」（前書き）

登場人物

・月野（つきの）　廻（まわり）

特別な力を持つ転校生。

・古倉（こくら）　彩音（あやね）

廻の友人。

・前島（まえじま）　久志（ひさし）

廻と知り合いである刑事。

回転7：「――本当」

「なっ、う、嘘でしょ！？」
「っふっはは！」
男は冷笑した。
「そうだな、これはどうだろう？
『俺を倒して先にいけ』とか
『俺を倒すまでここは通せねえ』とか」
「――本当・・・・・なのね」
廻は静かに怒る。
それにいらついたのか、思いっきり足で廻を飛ばした。
「生意気言ってんじゃねえよ！てめえはてめえの作った空間で死ぬんだ！！」
この空間を作った主（まわり）が強い衝撃にあったせいか、
空間が崩れ始めた。
「！」
（元の世界に戻ているのか）
「いいや、違うよ」
倒れている廻が言う。
倒れたまま、いう。
「これは、新たな世界」
「な、何言ってる？よく見ろ。さっきまでいた校舎・・・・・」
雰囲気が違う。
どこか色あせている校舎。
「ど、どこだ、ここ！？」
きょろきょろと周りを見たところで何か変わるわけではない。
「あなたの被害妄想（パーセキューションコンプレックス）は確かに強い」
「の、能力が分からずにいるお前が言うな！」
廻は一歩立ち上がる。

傷は全快していた。
服までも。
「わかる。私には。」
髪がポニーテールに束ねられていく。
もちろん、手は使っていない。

「あなたの能力は、他人を思い込みに連れ込み、
その思い込んだ現実と全く違う現実を突きつける。」

「ぐ・・・・・・っ！」
（悔しいが外れていねえ・・・・・）
だから、と続ける。

「思ったことと逆にすればいい」

回転７：「――本当」（後書き）

あ、今更ですけど「村部先生」は
「むらべせんせい」じゃなく「むらぶせんせい」でもなく
「そべせんせい」です。

回転８：「さあ、いくぜ」（前書き）

登場人物

・月野（つきの）　廻（まわり）

特別な力を持つ転校生。

・古倉（こくら）　彩音（あやね）

廻の友人。

・前島（まえじま）　久志（ひさし）

廻と知り合いである刑事。

回転８：「さあ、いくぜ」

「逆のことをする？不可能だ！」
男は激昂する。
「やってみないとね。」
“たん”と地を蹴り男の頭上へ回る。
かかと落としを食らわせるらしい。
「見え見えな行動はやめ――」
だが、食らう。
「なぁ！？」
食らったのはかかと落としでなく、真後ろからの強い蹴りだった。
男は蹴りの反動で数メートル飛ばされた。
壁に当たった衝撃で、舞台が廊下から、体育館へと変化した。
「廊下とか、戦いづらいからね」
廻のはからいだった。
「ふ、いいじゃねえか、本気かよ」
そう言って、ナイフを片手に一本ずつ逆手に持つ。
ナイフといっても包丁のようなヤワなものじゃない。
いかにも戦闘向けなナイフ。
ナイフを持つ柄の部分から図ったとしても３０センチ前後はありそうな長めのナイフだ。
柄には、穴が空いており、そこに指を入れしゅるしゅると回している。
「生憎。あなたは生かして警察に飛ばすつもりだから、肉弾戦で行くよ」
そりゃ大層なこった、と感嘆した。
「さあ、いくぜ」

「――んな・・・・・」
（んだと！？一発も当たりやしねえ！ましてや、あいつの攻撃ばかり当たる！）
男は体育館のどまんなかに大の字で転んでいた。
ナイフは彼と引き離れた所にべきべきに折られ虚しく置かれていた。
「そろそろやめたら？じゃないと腕折っちゃうよ」
廻はナイフのそばに行き、超能力のような力でナイフを浮かせ、手元にとどめる。
そして、そのナイフは灰と化し“さらさら”と消えていった。
「あなたのナイフもなくなった。為す術もない。」
「ふん。俺は肉弾戦もいける派でね」
「へぇ」
（だが、そんな話じゃない！俺の攻撃が当たらねえ・・・・・）
廻は暇そうにナイフの複製など作って遊んでいる。
（まさか――）

「「俺の能力を模写し、それをさらに向上させた、とか」」
一字一句間違えず、重なる声。
「・・・・・・――そろそろ面白くなくなっちゃったね」
「！！」
すく、と立ち上がり男に近づく。
「ま、まて！まだ分かり合えるかもしれねえ」
「そんじゃま。“悪役”は“せいぎのひーろー”にやられちゃってぇ」
右手を強く、強く握り締める。

「くださいな！！」

顔面にパンチがクリーンヒットした。

回転９：「あ、でも」（前書き）

短め。　祝！十話！

回転９：「あ、でも」

その後。
犯人たちは無事に警察に明け渡された。
「ところでさ」
「？」
廻が彩音に問う。
「なんで、襲われなかったの？」
「ああ、犯人に？」
そう。
あいつは、彩音を誰かが襲うと言っていた。

『俺の部下はダミーだ。
本当の部下は今頃あの嬢ちゃんを殺しに行ってるだろうね』

あれは、なんだったのだろうか。
「あ、でも、一応きたんだよ。あたしの顔を見て逃げてったかな」
（犯人は彩音の顔を知らなかった？）
そもそも、見て逃げるとはどういうことか、と廻は考える。

廻は一軒の居酒屋にいた。
「零、という人物は来てませんか」
その名前を聞いた店員は大慌てでＶＩＰルームへ廻を通した。
「やぁっほぉ！廻ちゃん」
彼女は請負人の零（れい）。
透き通るような腰までの黄緑色したサラサラロングストレート。
炎と間違えるかのような赤い瞳。

「今日はどういったお話（そーだん）かな？」
「実は――」

回転９：「あ、でも」（後書き）

零は、ナチュラル・マスターからの引用です。もうキャラ考えるとか面倒なんです。（おい

回転１０：「心得ちゃってるよね」

「実は、私の友人について教えても――」
「彩音ちゃんのことだね！きっと！」
話を最後まで聞いて欲しいものだ。
まあ、あっている。
「あ、はい、そうです」
「それだったら話は早いもんね！あの子はね
　って、ここじゃあ言えないはなしじゃんか！」
ノリツッコミである。
どうやら、場所を変えるらしい。
「僕ちゃん行きつけのお酒屋さん行っちゃうもんね」
かたん、とその場を立って、立ち去ろうとした。
「零様、お勘定を」
「ん。」
クレジットカード。
「ありがとうございます。合計で十万五千円になります」
「チャッチャとしちゃって。僕ちゃん急いじゃってるの」
零の目には酒瓶数本が目に止まる。
「店員ちゃん、あの酒瓶三本ほどちょうだいよ」
「？」
指さしたのはこの店で一番高値の五万円台の酒瓶。
それを三本。
大した料と量だ。
「お、お買い上げありがとうございましたぁぁ！」
店長も含め、店員総動員で零を送った。

零に言われ付いてきたのは豪華な家。

城という比喩が正しそうな。
「僕ちゃんのおうちだよ。一日本国民なら、心得ちゃってるよね」
そうだ、と廻は思い出す。
零は請負人であり、大金持ち。
各地に別荘やらなにやらを所有し、この不景気という不景気の中、
数億、数兆とやすやす稼ぐのは彼女一人ぐらいだろう。
「さて、本題にはいろっか。君は、彩音ちゃんの、何が知りたいのかな？」
子供のような可愛らしい笑顔には、
黒く、ブラックホールのような飲み込まれそうな闇を秘めていた。

回転１１：「ちゃんちゃん♪」

零に真実を聞かされ数日経った今。
特に何の変哲もなく彼らは過ごしていた。
変わった、と言えば。
廻の人気度、知名度、である。
あの、侵入者騒動により、だ。
が。
その知名度や人気があだとなった。
他校や、高校生、不良から喧嘩を売られる羽目になったのだ。
もちろん、成敗したが。

「まーわり！おっはよー」
「彩音」
「どったのー？おはようって言われたら、おはようって返すんでしょ？」
「・・・・・・・・・・そう、だね。おはよ」
「うむ、よろしーい」

学校の校門に入ったところで、体育館から豪音が響く。
屋根から煙。
（・・・・・・・）
廻は彩音を置いて、体育館に向かう。
体育館玄関から入ると、ひとりの少女がいた。
「月野、月野廻はどこだ！」
髪の毛は黄緑色。前髪おかっぱで、あとはみつあみ。
オレンジ色のセーラー服を身にまとっている。
両手にはペンチやら金づちやらの大工道具。
「私が、そう、だけど」

「ひゃひゃひゃひゃ！マジで言ってんの？あっはは！」
彼女は狂ったように笑う。
「あたしの名前は可知（かち）　響子（きょーこ）！今日、あんたを殺しに来たよおお」
「かち？聞いたこと・・・・」
「よそ見してんじゃねえよ」
一瞬で後ろに回られた。
反応してよけようとした瞬間はもう、遅い。
重い金づちが鈍い音を出して頭にあたる。
水の上を石が跳躍する原理と似たような形で
廻は何度か床に叩きつけられ数メートル飛んだ。
「ぐっ」
頭に激痛が走る。
意識が。
だが、これだけで、倒れてしまっては、だめだ。
無理矢理体を起こす。
「・・・・・・っはあ、っは」
「あれー？今の一撃、入ったと思うんだけどぉ」
“ぼたぼた”と床に落ちる大量の血。
それが、ヒットしたことをしめす。
「ひゃひゃひゃ！やっぱりあたってたんだ？」
そう笑いつつ、持っていたペンチやらでジャグリングを始めた。
「武器もちなよお、素手であたしの“工具戦法”にかてっこないってえ」
「――るさい」
理性を。
意識を、保たねば。
やられる。
「・・・・っぐ、は、は」
今度は腹部に激痛。
見ると、ペンチが“ぶすり”と突き刺さっていた。

「な、え、あ、あああああああああああああああ！！」
“どぶどぶ”と、バケツをひっくり返したように血があふれ出る。
「あああああああ！あああ！」
「おしまーい、ちゃんちゃん♪」
そこで、意識は途切れた。

回転１２：「だぁかぁらぁぁぁ」

目が覚めたのは夕方。
場所は・・・・・・、保健室。
（どーやら、私、生きてたみたいね）
それにしてはペンチがぶっ刺さった筈のお腹が痛くない。
「よお、起きたか」
保険医の先生の声がする。
「だいぶ寝てたな。朝にあの事件があったろ？
今日は緊急で休みだぜ、ったくよ。」
俺の休日を返せよ、と嘆く。
（あんたのなんて、知ったこっちゃないよ）
「！　そ、そうだ！この傷はなんで治ってるの！？敵は？！」
「おいおい、一度に言うな。まず最初から、解決しよう」
「・・・・・・・・・・・・、傷」
「あー、はい。それは俺が直した。以上」
「・・・・・・はあ？――敵」
「てめえは「はあ？」と「単語」しか喋れねえのか、あん？」
まあいいがな、と続ける。
「敵はな、お前が倒れたあと、
通常通りに、普通通りに、平常通りに、尋常通りに。

学校行ってたぜ」

「・・・・・・・・はあ！？」
「だぁかぁらぁぁぁ」
「すいません・・・・・・・・・・・・」
「敵はあいつだけじゃねえ、橙学園だ」
「だいだい、がくえん？」

「ああ」

保健医の先生は蜜谷（みつや）　裏峪（りたに）と言って、
廻と同じ不思議な力を持つ人らしかった。
どんな動機か知らないが、廻りに協力してくれるらしかった。

早速。
土日に先生の家に行くことになった。

回転１３：「両者の」

「お前自分のことなんだと思ってる？」
大きな屋敷の応接室で裏峪にいきなり言われたひとこと。
「はぁ？」
「ん、今のは俺の言葉が足りなかったな。
サークラー、リボルバー、かって」
「も、もちろんサークラー！」
サークラー、リボルバー。
サークラーは基本正義をモットーとし、
リボルバーはそのまま。
悪がモットー。
「ふん。“俺もそう思ってた”」
「？」

「お前は、“サークル・リボルヴ”。両者の仲介役だ」

「！」
「今橙学園は、サークラー、リボルバーの両者で荒れ果てている。
そして両者ともどもお前の力を欲している。わかるか？」
ごくりとつばを飲む。
「・・・・・・・・・・・はい」
「いい子だ」
ひと呼吸置いて、廻は言う。
「要するに
私が彼女らを止めればいい話ですよね」
「よくわかってんじゃねえか。で、次は？」

「先生。」
「あん？」
「私に戦いを教えてください」
「ヤダ」
「えええええええええ？！」
「俺、医療専門だしぃ」
廻は心底引いた。
「引くな、アホ。俺の知り合いで受けてくれた人がいる。」
「おぉ！」
一気に笑顔に変わる。
「来るまで待て」
「来てねえのかよ」

回転１４：「ね～ぇ」

ぴんっっっっぽーん。
不意にそうインターホンの押される音がした。
（溜めたな・・・・・）
「おぉ！この毎回困るおし方は！来たか！」
「注意しろよ！」
ぱたぱたと嬉しそうにかけていく。
親友とかなのだろうか？
「にぎゃあああああああ」
とか、めるへんちっくな想像を覆す悲鳴が聞こえた。
ぬしは、まあ、裏峪。
「ごめん！嘘だってええ！ひいぃぃぃぃぃ！！助けて！廻ぃぃぃ！」
「どーしてそうなる！？」
ほんの数秒しか経ってないはずなのに、
血みどろで戻ってきた保健医。

「はぁい？」

現れたのは女性。
スタイルも抜群だ。
サラサラの金髪をボディラインに沿って垂らしている。
紫の肩までのカットソーを隠すように白いＹシャツを羽織っている。
下はラインを強調するようなデニムパンツ。
そして黒いパンプスである。
勿論誰がどう見ても
「せ、戦闘不向きそうですね」
「う、ふ？それは偏見よぉ」
彼女は明日本（あすもと）　理吹（りぶき）。

「おい、明日本。さっさと進め。俺らが通れねえ」
「あぁらぁ～？ごめんなさぁ～い？」
次に出てきたのは、冷たい瞳の全身真っ黒な男だった。
無戸（なしど）　終（しゅう）。

「今日来てくれたのは二人だけだ。あと数人来るはずなんだけどな。」
すまん、と謝る。
「いえ、いいんです。集めてもらえるだけで・・・・・」
「ね～ぇ、私たちにあなたの自己紹介して頂戴よ」
「え？ああ」

自己紹介もすみ、修行段階へと進みつつもあった。

回転１５：「倒せ」

「んふ。そうねえ、廻ちゃんに足りないもの・・・・」
「色気とか言ったらぶっ飛ばしますよ」
「やんっ」
図星かよ。
「そうね、終も思ってると思うんだけど、アレね
あなたは感情的すぎるのよ」
「その面はカバーした」
と、裏峪。
「あら、そう？昨日ぱっとみてそう思ったから述べたのにぃ」
「言われる前にメンタルチェックをな」
「んふん。まあ、今回の戦闘にはあなたの大好きな友達ちゃんがいないものねん」
「ああ、実際狙われてるのは廻本人だ」
そう“二人”が喋ってるとき、廻はふと気づく。
「あの、終さんは？」
「ああ、面倒だって言って帰ったかな」
素直すぎる。
裏峪は「それに」と続けた。
「まだ一人居るんだよ。仲間。」
「？」

裏峪の話によると、本来はもっといるのだが、
実際、参加してくれるのは四人、多くて六人だそうだった。
その中でも理吹は率先的に動いてくれたらしい。
彼女によれば
「困ってる子が一人でもいて、私がその子の力になれるなら喜んで

ぇ？」
だ、そうだ。
あまり戦えるとも思わないが。

「さて」
と裏峪が言う。
ここは裏峪の大きな屋敷の一部――。
特設道場。
「今日のうちに理吹を倒せ」
むちゃぶりだった。

回転１６：「はじめようか？」

「あらんっ！負けちゃったんっ？」
「ふん、まずますだな。だが時間だ。三日か」
「ふひぃぃ！？」
ぜえはあ、と肩で息をする廻。相当本気を出したのだろう。
「さ、明日にでも乗り込むか」
「はいいいいい！？」
「？　こいつを倒せるのは俺でも無理なのによ、出来るなら文句なしだ」
「なんだそれ、テメェぶちのめすぞゴルァァァァァ！」
「口が悪い廻お嬢様だ」
「ブッ殺す！」
理吹は二人を置いてそそくさと進む。
後ろでブチブチと何か神経のようなものが切れる音がしたが、一度も涼しい顔で振り向くことはなかった。

「あら？終じゃなぁい」
「・・・・・・・ふん、色魔め」
「ちゃんと辞書引きなさいよ。意味違うわ」
ぬぅ、と悔しげに言う。
「おい、ところで裏峪が居ねえぞ」
「ああ、廻ちゃんにブチのめされてる頃よ」
「無視するお前、鬼かよ」
冷静に突っ込む終だった。

「にしても、修行ってもういいのか？」
「いいんじゃなぁい？あの子、三日で私を倒したんですもの」

「！　・・・・・・化け物かよ」
「んふふ、見込みのある子ね」

そんな噂をしているうちに二人がやって来た。
というより、血みどろでボコボコになった保健医を廻が引きずってきた、とでも言おうか。
「ごっめーん☆待ったー？」
「フン。もっとぶちのめせばいいんじゃないか？」
「・・・・・・・だってぇ？せんせえ？」
「ごめんなさい、やめてください。お願いします。つーか俺が何したんですか」
何もしてないことこそ悲劇。
どこかの名言のようなことを終はつぶやく。
目の前には橙学園。　その名のとおり、真っ赤、否、真オレンジ。
校長の趣味なのだろうか？目の痛くなる色が。悪趣味である。

「さぁて、第一次橙大戦でもはじめようか？」

回転１９：「みぃつけたぁ」

橙大戦とか言ってものの、泥棒のようにこそこそ侵入する。
「あ、あの、四人でいいんですか？」
「ん？橙学園内に仲間がいる」
「・・・・・・・・・・」
スパイというやつだ。

「しっ」
理吹が口に人差し指を当て「静かに」というポーズをとる。誰か来たのだろうか。
耳を澄ますとコツン、コツンと誰か歩く音が聞こえる。
「・・・・・・・・」
勿論女子校なので女生徒、女教師しかいない。

「みぃつけたぁ」

「！！」
その大人びた声に振り向く。
「・・・・・・やぁ、レツカ」
「な、仲間？」
「こんにちは。わたしは朝日意（あさびい）レツカ」
ニッコリと微笑む彼女に、廻は軽く会釈をした。
「こいつとは保健師仲間なの。以前ね、私こいつの助手をしてたのよ」
「へ、へえ」
「隠れなくていいわ。わたしの友人がくるっていう話が通ってる」
「・・・・・・さすがレツカ」
ニヤリと笑う彼。

「いいえ、“大先生様”のお願いですもの」
「・・・・・・・・生徒の前だ、それはやめてくれないか」
「？」
やけに暗いトーンの声で彼はそう言った。　何か知られたくない過去でもあるのだろうか？
「ふぅん？貴方が裏峪の知り合い？・・・・・っは」
「なぁに？クス、貴方こそどうなの？・・・フン」
バチバチと火花がちっているように見えた。　なんでムキになるわけ？

「そぉんな、色香まいてる女じゃモテないわよ？」
「るさいわね。あんたこそちょっと裏峪に寄りすぎじゃない？」
「あ、あの・・・・・今そういう場じゃないんですけど」
「「子供（ガキ）は黙ってらっしゃい！」」
「は、はい・・・・・・」
廻は怖くなり、裏峪に早足でついて行った。

「どこへ行くんですか？」
「保健室だ。一時避難だよ」
「はあ」
廻は曖昧な相槌を打つ。　それならなぜ、レツカが誘導しないのか、と疑問に思ったからだ。
「どーした？ああ、不思議か？」
「え？まあ」
「俺の得意能力は“解析”または分析。この学園は既に分析済み。見取り図なんて数分で書ける」
廻はすごい、と感嘆した。
それを見て裏峪はふっ、と微笑む。
「ごめんな。戦えなくて」
「ああ、本当に邪魔だぜ」

廻のかわりに話したのは終だった。　その声に裏峪はむっとする。

「お前ら気付いてねえだろ？あの姉ちゃんニセもんだぜ」

すると後ろから理吹の悲鳴が聞こえた。

回転１９：「生徒会の」

後ろから理吹の悲鳴が聞こえた。
「理吹！？」
「んっはー♪　オレは、薗園（そのぞの）　レイキ！！！　生徒会の庶務に属す！！」
口の悪い彼女はそういう感じらしい。
「生徒会長様に、お前らの殺人を頼まれた！オレだけで削除して上の方々に迷惑を掛けないように頑張るからさっさと死んじまえ！」
いつの間にか両手には銃を構えていた。
「げっほ、この子は私が相手するわ。多分本物のレツカはどこかにいる・・・・・、お願い、先に行って！」
三人はその願いを受け入れ、先へ走った。

「さあ、君？日本には銃砲刀剣類所持等取締法ってのがあるのよ～～？」
「んなこた知ってるぜ～～？そんならよお、もしオレがもっていい部類の人間だったら・・・・・、どーすっかな？」
「・・・・・・・クス、それなら“なんの役職についてるのかな？”」
「んっはは！そら決まってるぜ」
指でくるくると銃を弄ぶ彼女。　そしてチャコ、と音を立てて銃が止まる。
「オレの役職は　警察官・自衛官・海上保安官・税関職員・入国警備官に、刑務官。そんでもって、麻薬取締官！さらには都道府県の麻薬取締員、んで、鉄道公安職員だ！」
「・・・・・・・・・・・・ッ」

理吹は息を呑む。　――彼女の属する仕事は、拳銃を装備していい日本のすべてのものだった。
「ん～～～、まだあるんだけど、覚えてないや～～～」
ただの学生じゃない、そう判断した理吹は――
「本気出すわよ」
そうつぶやいて微笑んだ。

「理吹さん、大丈夫ですか・・・・・・？」
「学生ごとき相手にして死ぬ輩じゃねえよ」
たたた、と走りつつ裏峪と廻は会話をしていた。
「あ、いたいた～～」
「！」
「レツカ・・・・・・・・・ッ」
「なによ？構えて～～？わたしは本物よ」
「いや、かくかくしかじか四角いムーヴでして」

「へぇ～～～、んなるほどねっ！」
心なしかワクワクしている彼女。
「なんのお話おなさってるのでしょうか」
「そっりゃもう！・・・・・・って、皆っ」
皆はその場からステップし、離れる。
そこにいたのは――

「生徒会、書記の美々津（みみつ）晴（はれ）ですわ。
　これ以上ない程の血祭（パーティ）りにして差し上げます」

回転１９：「とーおせんぼっ！」

「ここは俺がやる。ちゃっちゃと片付けてすぐ追いつく。」
といったのは終だった。　意外なやる気だ。
「あら？わたくしの餌食になるのは真っ黒いあなた？　――クス、黒には鮮血が似合いますわ」
「ふん、キチガイめ」

「恩に切る！」
そう言って三人は駆け出した。

「あん、逃がしてしまいましたわ。　――さ、この代償、小さくはなくてよ」
「ふん、死ぬのはてめえだ」
そう言って二人は武器を構えた。

「廻、二人が心配なのか？」
「・・・・・・・はい」
「ったく・・・・・・・」
「人を信じろよ」
「裏峪先生、くっさ～～い」
「るせえなあ」
真っ赤になる裏峪。　それを見て、レツカは腹を抱えていた。
「次を右！　――話をつけるには生徒会長に話したほうがいいでしょ」

「ああ。すまんな」
「いいわよ、気持ち悪い」
「とーおせんぼっ！」
と。
曲がり角に佇む小さな可愛らしい少女。
「会計の夏（なつ）七里（ななり）だよ！　みぃんなぶっ殺してあげるから安心して地獄に堕ちてね」
セリフが可愛くなかった。
「ななと戦ってくれるお馬鹿さんは誰かな～～？勿論三人相手でも――むぐっ！」
裏峪が七里の口を塞ぐ。
「あー、るせえるせえ、おい、廻俺がこのガキを潰す。　生徒会室までそいつに連れてってもらえ」
「――・・・・はい！」
廻は二人を置いて、レツカと生徒会室に向かった。

回転２０：「いらっしゃい」

その後、すんなり生徒会室についた二人。　恐る恐るそのドアを開ける。

「いらっしゃい」

威嚇をしているような、だけども、それでも落ち着いた声。
中に居たのは二人の少女。
「改めてこんにちは。サークル・リボルヴさん？私は生徒会長の揃（そろえ）みもな。」
「ひゃひゃ！あたしは可知　響子！！忘れてないよねえ？！」
そう、あの日廻を襲った。　彼女は――
「因みに、副会長！！よろしくねぇ」
ひゃっひゃひゃひゃ、と不気味に笑った。

「――処で、朝日意先生？彼女に校内の案内をしてくださったのですか？」
「？　いえ？　見知らぬ他人に。そんなことないでしょう」
「では、何故？」
「勘が悪い会長ね。わたしはここへ潜入していたスパイよ？」
会長は眉一つ動かさない。　だが、持っていたペンにこもる力は大きくなってゆく。
次第にペンはバキりと折れた。　床には彼女の血が滴る。
「スパイ、ですか」
椅子を引き、立ち上がる。　その動作からも怒りがうかがえる。
にしても鈍感だったらしい。
手に付着している血を舐め彼女は妖艶に笑む。
「う、ふふ。そう、ですか」

「かいちょぉ、あたしあの保険医殺りますね」
「お好きにどうぞぉ」
二人はにやあと気持ち悪く笑った。

「揃さんだったっけ」
「みもなで結構です」
「あぁ、そ。どうして私が欲しいわけ？」
「そうですねー、貴方の。カイという能力です」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

回転２１：「信頼の心。」

「そうですねー、貴方の。カイという能力です」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
“カイ”。　それは廻のもつ特殊な能力。　誰もが欲する力を持つ。
「これは誰にもあげられない。あの時決めたから」
「維持でも譲らないと？」
「・・・・・・・・・・・・・・・譲ってもいいけど知らないよ」
みもながくすりと笑む。　謎を秘めた笑み。
「それよりここで戦闘なんてしちゃっていいわけ？他にも学生がいるでしょう」
「阿呆なのですか？　ここは生徒会特設棟。そこらの雑魚学校と同じにしないでくださいません？」
そう、橙学園には何棟も存在する。　簡単に挙げると、一年棟・二年棟・三年棟・生徒会特設棟・職員棟。　橙学園はとてつもなく大規模な学園なのである。
「ま、どうでもいいですね。　――行きますよ」
「ばっちこーい」

小一時間の末、結果――

廻側の圧勝だった。彼(てき)らがリボルバーであったのもそうだけど、最も！
それに対する廻たちがサークル・リボルヴだったからの圧勝。
廻のもつ、“カイ”という能力によっての圧勝。
以前に彼女らは普通に普通で普通な普通の女の子だ。　戦闘なんて無理がある。
「・・・・・・・ふ、負けですね。――こんな敵の要望であれば聞いてくれませんか？」
「どーぞ」
「カイとは、どうゆう力なのですか？」
「どうもこうも、ないよ？　この力は簡単だ。

ただの感情さ」

「かん――じょう？」
「そ。君たちが欲するような、私しか持ってない、ね」
「――――ふ。」
負けを認めるように微笑んだ。
「それではその感情はなんなの・・・・」
それを問うたのは、響子。
「・・・・・響子。いいでしょう」
そんな問い分かりきってますよ、と体を起こす。

「仲間を信じ頼る信頼の心。　今の人たちが持ってないような、ね」

「・・・・・・」
「そうですね。私たちに足りなかったのはそれでしょう」
「・・・・会長・・・・」

「私たちはもう一度新しい生徒会を創り直します。参考にさせていただき有難うございました。」
「何もしてないよ。　それじゃ、私からいいかな」
にっこりと微笑んで手を差しのべる。
「今日から親友」
「ええ」
こうして、五人の戦いは地味に終わった。

最終回転：サークル・リボルヴ

翌日――
「有難うございました。」
廻は裏峪の家に協力者四人を集め、そう言った。
「いんや。なんでもねえよ。んで？お前はこれから何するわけ？」
「世界をまわります。他のリボルバーたちを放っておくにはいきませんからね」
「手伝いは？」
「・・・・・・・・・ここまでお世話になったんです。もう・・・・」
「あらん？酷いわねッ。私は行くわ」
下げていた頭を上げ、廻は驚いた顔を隠せなかった。
「・・・・理吹さん・・・・」
「ダメ？でもまあついて行くわ。　貴方といると楽しいもの」
大人の微笑みを向ける理吹。
「俺はパスだ。　――旅路で会ったら無視してくれ」
そういって足早に去っていく。　それを追うようにレツカが走る。
「ごめんなさい。　みもなちゃんは許してくれたけど一応手配書が出てるわたしはお付き合いできないわ。　会ったらよろしくね」
「いえ、お気持ちだけでも」
そういう彼女に手を振った。

「俺も一応行こう。邪魔ならいいが」
「いえ、お願いします」
そう、廻が言うと裏峪は自分の家の鍵を閉める。
「行きましょう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4654s/

サークル・リボルヴ

2011年10月3日11時12分発行